

熊野の
木林から

怪熊野

「旧・中辺路町の怪異(其の二) 安珍と清姫」

其の(七)

和歌山大学
システム工学科
システム学
環境システム
中島敦司教授



蛇に変化して安珍を焼き殺してしまった清姫(道成寺縁起絵巻より、パブリックドメイン)

中辺路の中で最も有名な怪異話は、おそらく『安珍と清姫の物語』の悲恋話であろう。物語の最後の舞台は旧・川辺町の道成寺であるが、中盤までは中辺路の真砂(まなご)を舞台にして展開する。清姫は真砂のお姫様だったからだ。映画にされるほど有名になった『道成寺物語』では、真砂の地で安珍と出会い、相手にされなかつ

た、あるいは捨てられた清姫が、悲しみのあまりに富田川に入水し、断ち切れなかつた想いと憎悪のために蛇に変化してしまい、道成寺で鐘に隠れた安珍を焼き殺すものの、最後には二人とも成仏するというストーリーになっている。



真砂にある清姫の墓所

『安珍と清姫の物語』の原話とされる話は、平安時代の『今昔物語』や『大日本国法華験記』の中に既にみられ、それらには清姫の名も安珍の名も出てこない上、その内容は法華経の宣伝要素が強い。清姫の名の初出は江戸時代になってからで、浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』(寛保二年、一七四二年が初演)が最初だとみられ、以降は悲恋話、怪談話として語り継がれるようになる。この話の解釈のひとつに、蛇は洪水や土砂災害の象徴であり、焼死は落雷によるもの、つまり安珍は台風の被害によって命を落としたという説があるが、では、蛇に化ける前の清姫とはいったいなんだっただろうか、という疑問が残る。

真砂には全く印象が異なる話も伝わっている。真砂には確かに清姫という女性が実在したようだ。真砂兵部左衛門尉清重(延喜元年、九〇一年没)の長女で、延長六年(九二八年)に没した女性が清姫だという。真砂では、清姫は心やさしく学のある才女で、後に天皇や皇后の身の回りをお世話する采女となったとも伝わっている。さらに、異説の中に、実在した清姫は鉱山経営者であり、安珍が清姫から鉱床秘図を借りたまま返さないで、怒った清姫やその一族が安珍を追い詰めたという話もある。真砂という言葉からは、確かに真砂砂鉄を用いた「たたら製鉄」のこともイメージされ、周囲には小規模ながらも硫化鉄鉱床がみられる。このことから、鉱山利権説もあり得ない話ではないかも知れないし、興味深いのであるが、説としては大胆すぎるかも知れない。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

